

ごあいさつ



社団法人 日本 WHO 協会
理事長 関 淳一

2011年3月11日に東日本大震災が発生してから、早くも2ヶ月が過ぎました。しかし、今日尚、マスメディアの記事は、震災に関する報道が大部分を占めております。

被災地の方々が直面しておられる様々な困難や、御一人御一人の心の内での悲しみ苦悩などは、非被災地に居り、直接被害を受けていない私達には、到底測り知れないものと思われま

しかし、被災地からの記事等を目にする度に、本当に胸が痛みます。

一方で、国内外の多くの方々支援の気持ちが被災地の方々の心に伝わったと感じられる報道に接した時には、何とも言えない温かい気持ちがこみ上げて来るのを感じます。

今回の「目で見えるWHO」は、はからずも東日本大震災の特集号の形となりました。国際医療を専門とされており、今回の震災でも実際に現地での支援活動に携われた、中村安秀理事（大阪大学大学院人間科学研究科教授）が全体構成から執筆依頼まで全てを引き受けて下さいました。お陰で、全ての記事が実際に被災地に入り、様々な形で支援活動をされた方々の体験に基づく記録集的なものとなりました。これらの記事は必ず、記録として後に残るものと思います。

また、今回の大震災では、特に海外からの大きな支援の力を強く感じました。外務省の集計では、個人や民間団体を除いても、5月10日現在で146の国・地域と39機関から支援（人的支援、物質支援・寄付金）の申し出があり、その大部分が既に被災地に受け入れられているとのことです。（外務省：諸外国等からの物資支援・寄付金一覧より<http://www.mofa.go.jp/mofaj/saigai/pdfs/bussisien.pdf>）

グローバル化の時代とは言え、情報伝達の速さもさることながら、世界の多くの国々の人々の思いと、素早い行動を目の当りにする時、実感として、地球上に住む我々は、どこに居ようが、やはり人間同士だと強く感じます。

今回、原稿をお寄せ下さった方々は本当に睡眠をとる時間もままならない活動のさ中に、原稿を書いて下さいました。ここに改めて、厚く御礼を申し上げます。

最後に被災地の一日も早い復興をお祈りいたします。

2011年5月